
宗教とケアを架橋するもの

西出 勇志¹

マスメディアは宗教に冷淡である。存在自体に目を背けてきたと言えるかもしれない。そんな信仰に無理解なメディアに変化が現れ始めた。東日本大震災で人々をケアする力を目の当たりにしたためである。マスメディアのありようが社会の意識の反映であるならば、宗教と社会の関係に変化の兆しが出てきたと言えるだろう。呼応するかのように、宗教者のケア志向にも拍車が掛かる。宗教とケアを架橋するものは何か、支え手にどんな特徴があるのか。取材現場から報告する。

¹ にしでたけし：共同通信長崎支局長

教団とマスメディアの不幸せな関係

20年以上、宗教界取材している。そう言うと、広報と関係のない一般の宗教者がよく投げ掛けてくる質問がある。「宗教担当というのは、会社は何人くらい、いるのですか?」。一瞬、答えに窮する。えー、定義に抛ります、と口を開いた後、ぐだぐだと説明する羽目になる。結論から言うと、どの社もほぼいないに等しい。

京都の東、西両本願寺には司馬遼太郎さんも産経新聞記者時代に所属した京都宗教記者会がある。少し前までは知恩院にもあった。真偽は定かではないが、バチカンと並び、世界に二つしかないと言われる記者クラブであり、宗教界に関する事件、人事、イベントなどを取り扱う珍しい担当である。筆者もかつてはメンバーだった記者会だが、地元紙をのぞき、大阪や東京で腰を落着けた記者活動をする前の支局勤務の一つであり、1年程度の通過ポイントにすぎない。担当するのが、四季折々の祭事、つまりは祇園祭であったり、葵祭であったり、大文字で知られる五山の送り火であったり、京都という街ならではの対象であるために希望者は多く、かつ、どの勤務地にもある警察や県庁などと異なるために思い出深い仕事にはなるのだが、宗教そのものに関心を抱き、継続して取材する記者はほとんどいない。しかも、いかに仏教の本山が集中する京都とはいえ、宗教全般をウオッチするのにふさわしい場所かというところ、これもやや疑問なのである。京都宗教記者会の名称通り、あくまでも「京都の」宗教記者会と考えるべきだろう。

それでは首都東京はどうか。ここに記者クラブは存在しない。文化庁にかつて、実質をほとんど伴わない記者会は存在したが、現在のところ、東京で宗教を包括的に報じるための専門的な拠点は無い。各新聞社の学芸部や文化部に宗教を何となく扱う記者はいるものの、非常に数が少ない上、別の基幹的な分野の担当者でもあるため、ときどき思い出したように記事が出るケースがほとんどである。つまり、ジャーナリズムの組織としての必要性からではなく、記者個々人の思いや強い関心によって

宗教報道が不十分ながらも担保されているとって過言ではない。

この態勢そのものにマスメディアの意識が反映されている。新聞を中心とした伝統的なメディアは、行政や産業界、スポーツ界などあらゆるジャンルに網の目のように記者組織を張り巡らせ、社会全般をカバーしようとしてきた。総合指向が強烈なだけに、ここから宗教がこぼれ落ちているのは現代社会を構成する要素の一つだと考えてこなかったことの証左だといえる。宗教は「わけが分からない」「あやしい」非合理的ものの代表格で、近代のメディアである新聞が報じたり論評したりする対象ではなく、無きがごときもの、あるいは無視するものであるということだろう。その前段階で視野にすら入っていないかもしれない。

新宗教を含めたさまざまな教団の集会をのぞく機会が多い筆者は、そこでのあまりにも多数の人々の熱狂ぶりにクラクラすることがあるが、どんなに熱心な信者があちらの団体にもこちらの団体にも山のようにようと、関係がない。見なければ存在しないだけの話である。メディア内部には信仰者を軽侮する空気も少なからずある。それを反映し、差別表現や不快語に神経質なはずなのに「宗教に走る」などの粗雑な表現を無自覚に用いるケースもみられる。世俗の権化であるマスメディアと信仰集団としての教団は、根本から価値の体系が異なり、トラブルなどの接点を持つ数少ない機会に話がかみ合わないことが多々ある。その際のメディア側が抱く理解困難という感覚が、教団サイドの味わう無理解という感覚が、相互交通のあきらめにつながり、さらに縁遠い存在になっていく。話題になるのは、事件か、習俗と化した年中行事か、選挙の際の集票マシーンとしての存在ぐらいだろう。

マスメディアが切り取って差し出す「社会」の中に宗教の姿はほぼない。ただ、それは残念ながら「世間」の意識の反映でもある。だからこそ信者たちも、多くが信仰者としての顔を世間にさらさないように生きている。表裏一体の共犯関係が、ますます宗教を見えにくくしている。

被災地で心打たれた宗教の力

冒頭の問いに戻ろう。宗教者が考えるほど、宗教界の出来事に世間は関心がない。ただ、懸隔する世間の意識と宗教が近づいたと感じたのは、東日本大震災だった。大量の死が出現した未曾有の災厄で、やむにやまれぬ思いに捕らわれた数多の宗教者による行動、例えば、小雪が舞う瓦礫の中の慰霊行脚であったり、葬送のボランティアであったり、遺族のそばにいての生活を含めた支援活動であったり、宗教文化が濃厚に残る東北の地で神仏を尊ぶ被災者の対応とも相まって、マスメディアにある種の衝撃を与えた。ほとんど考えたことのなかった「良きもの」としての宗教、宗教者の姿がそこにあったからである。宗教を確認したメディアは、真摯な祈りの姿や支援活動を報じた。宗教者の姿に心打たれたのだろう。それがインターネットなどを通じて拡散し多くの人の共感を得た。背景に沈んでいた宗教が「社会」の中にふわりと姿を見せた瞬間だった。

宗教と日本社会の幸せとはいえないこれまでの関係を考えると、変化の兆しを感じる出来事である。俗の代表としてのマスメディアが、心打たれたものとはなんだろうか。宗教に人々をケアする力があることを初めて目の当たりにしたのが大きな理由なのではないか。悲しみ嘆く人々と宗教者が向き合う直接的なケア、宗教者による祈りの姿や創出された宗教的空間による間接的なケア。実体をクリアに理解したわけではないが、大衆の動向を常に探るアンテナが「これは新しい動きかもしれない」と反応したのだろう。宗教の力が「再発見」されたのである。

震災以降の日本社会における宗教者の在り方を考える上で「ケア」は最重要のキーワードなのではないか。メディアのありようを見ていて、そんなふう思うようになり、宗教者が行うケアの現場を中心に3年間取材した。対象は幅広いが、出会った多くは仏教者だった。それがこの国のごく一般的な宗教風景を映し出しているのだろう。主に僧侶が活動する現場を訪ね、インタビューを重ねるうち、宗教とケアをブリッジするいくつかのキーワードが自分の中で浮上してきた。変化の兆しがうね

りへと変わっていくのだとすれば、それを支えるポイントと呼べるかもしれない。

「超宗派」が担保する公共空間でのケア

その一つ目のキーワードは「超宗派」である。これは、ケアを志向する宗教者の新たな展開として注目を集める「臨床宗教師」というアイデアに顕著に現れている。

東日本大震災をきっかけとして生まれた臨床宗教師構想は、在宅緩和ケアの第一人者だった爽秋会岡部医院の故岡部健医師が提唱した。同僚である看護師が東日本大震災で亡くなり、ざわつくスタッフの気持ちを僧侶による読経が静めた様子を見て、病院などの公共的空間にも宗教者の存在が必要と岡部医師は考えた。自らががんになって生の終わりを間近に感じた際、「ちょっときつい」という思いとともに「死という闇に降りていく道標を今の社会は失っている」と感じ、宗教者にその役割を求めた。それ以前から、他界した肉親の姿を死ぬ前に見る「お迎え」現象が終末期の不安を和らげると認識していたこともあり、看取りの際の宗教者の必要性を訴えていた。岡部医師はこれらを総合し、公共的空間で医療職や心理職と連携しながら、災厄に苦しむ人々、終末期の不安を生きる人々に寄り添う宗教者の養成を企図した。死を前にした心の痛みや大切な人を失った悲嘆に対応するスピリチュアルケアをベースに、相手に求められた場合に読経や祈りの宗教的ケアを行う臨床宗教師はこうして生まれた。東北大学大学院に養成のための実践宗教学寄附講座が開設されて第1回の修了生12人が出たのは2012年秋。以降、神道、仏教、キリスト教、新宗教、イスラム教などさまざまな修了生が誕生、全国に支部も設立された。活動の中心はボランティアだが、岐阜県大垣市の沼口医院など病院で臨床宗教師として働く宗教者も出始めた。

公共的空間で心のケアを中心に活動する臨床宗教師にとって重要な

は、布教・伝道を目的にしない、つまり信者獲得の場と捉えないことである。受け手の「引きずり込まれるのではないか」「絡め取られるのでは」との不安を解消しなければ、ケアの場として成立しない。それを担保する重要な下支えが「超宗派」である。もちろん、各教団が組織の力を結集して発揮する社会貢献に大きな意味はあると思う。直接的な信者獲得を狙ったものでないことも理解する。真宗教団のビハーラ活動がこれまで積み上げてきた実績は素晴らしいし、キリスト教の各教派が展開する福祉活動は特筆に値する。新宗教教団の大掛かりで練り上げられた取り組みには驚嘆すべきものがある。ただ、さらに多くの人に宗教者の活動が受け入れられ、社会の下地づくりの一角を担うためには、多種多様な宗教者が共通のルールや倫理の下、宗派色を打ち出さないケアを志向することが大切なのではないか。

特定の教団色が前面に出ない「超宗派」での合同作業は、ケアの受け手側だけではなく、宗教者の意識にも大きな効果をもたらしている。仏教各宗派の僧侶や牧師、新宗教の指導者が集い、諸宗教交流の場ともなった臨床宗教師研修を何度か取材して驚いたのは、自教団以外の宗教者との出会いに刺激を受ける彼らの姿だった。故岡部医師の終末期に向き合った曹洞宗僧侶の高橋悦堂さんは、『全仏』（2013年6月号）に第1回研修に参加した体験をつづり、さまざまな宗教者の祈りの姿に「仏」を見たと言った。「宿泊先の寺院本堂、朝の静謐な時間の中、己が宗旨、宗派を超え皆で『南無阿弥陀仏』と念仏をした姿に『仏』を觀た。仏道者のひたむきな姿を觀たとき、私は涙を流していた。（中略）私が研修から得た一番のものは、信心を異としながら『仏』としての志を同じくする仲間存在である」。他者の祈りを身近に感じ、そこに信心の深みを見て取った参加者たちにとって、他宗派との出会いが自らの信心の深化につながり、他の信仰を尊重する大きな契機となった。これは震災がもたらした一つの恵みだろう。

1990年代初頭から諸宗教対話の世界を取材してきた筆者にとって、宗教間交流はごく普通の風景としてそこにあったが、トップレベル、ある

いは渉外レベル以外で、こうした交わりがあるのはまだまだ稀少例であることを今更ながらに深く認識させられた。つまり、他宗教、他教団との出会いの場は、これまでほとんどなかったことに気付いたのである。実際、自教団以外の宗教者と初めて親しく話したという人も珍しくなかった。震災を契機に、草の根レベルで「超宗派」の下地づくりが進行している。そんな実感を強く持つようになった。これと平行し、ソーシャルネットワーキングの発達によって、教団や宗教の垣根を越えて若手宗教者の横断的な連携が盛んになってきた点も踏まえ、宗教者ネットワークのネクストステージが用意されつつあるとの思いを抱く。

支え手としての「副住職」と「在家」

そして、宗教とケアをブリッジするキーワードをあと二つ、支え手に関して挙げておきたい。一つは「後継者」。親世代を引き継いで宗教界を担う次代であり、仏教界を例として具体的に挙げれば「副住職」である。裾野の広い仏教ブームは続いているが、仏教界の将来は決して明るいとは言えない。人口動態の変動、旧来の伝統的「家」感覚の希薄化、世代間意識のギャップは、寺院環境に劇的な変化をもたらしている。親世代、つまり現役世代は何とかしのげそうだが、これからはそうはいかないだろう。代々の寺院をいかに存続させるか。次代の担い手の危機感は切実だ。そうした状況の中で東日本大震災が発生し、多くの副住職たちも被災者支援にかかわった。社会が葬送の現場や喪失体験に宗教の持つ言葉や儀礼、ケアの力を再認識する一方、僧侶たちは自らの存在意義を根本から問い直す大きなきっかけを得たのである。寺を継続させる点だけに心を砕くのではなく、寺と社会のありようを見つめる後継者たちが目立ち始めた。寺の存続を図りつつ、僧侶として人々とどう向き合うか。全国各地の次代を担う僧侶たちの間で、公共性の意味を問い直す作業がこれまでにない規模で始まったように思う。

2013年3月、大阪市天王寺区の浄土宗應典院で開かれたイベントは、

そうした若手僧侶たちであふれる興味深い催しとなった。地域に開かれた寺として、NPOとの協働の場として、アートの発信地として、常に仏教界に新風を吹き込んできた應典院の秋田光彦氏が掲げたセッションのテーマは「寺業再興」。寺業とは何か。秋田氏は、お寺が「いのち」の全てに関わる取り組みと規定した上で「NPOのやっていることは実は寺院の原点に非常に似ている」と語り、若手僧侶らの意気を鼓吹した。NPOの活動がバラエティー豊かなように、さまざまな方向へと伸びていくケアの模索が寺院の可能性を開いていく。後継者が始めた、あるいは描く、ケアの真摯な取り組みについて懇談の席で話を聞いた。実に刺激的だった。

支え手としてのもう一つのキーワードは、これも仏教界を例にすれば、いわゆる「在家」出身者である。引き継いだ職業としてではなく、何らかのきっかけがあって宗教界に飛び込んできた人々。従来から社会活動する僧侶に在家出身者が目立つと感じていたが、震災以降は特にケアの現場で多くの在家出身者と出会った。なぜ、宗教者に、僧侶になったのか。そしてなぜ、ケアの現場で活動しているのか。不躰な問いをぶつけた。もちろん、その動機を特定するのは、本人たちにとっても簡単ではない。人は、いくつものきっかけが重なり合う中で選択をする。あるいは選択をせざるを得ない思いに捕らわれる。幾人かに重ねて聞き続けるうちに見えてきた共通のポイントは、身近な人々や自らが直面した生と死である。「いのち」への思いと言い換えてもいいかもしれない。宗教者とケアの未来を開いていく上で、筆者は彼らの存在や発想、活動のありようにいくつものヒントが潜んでいると考えている。3人の僧侶の姿を具体的に見てみよう。

「在家」出身僧侶の思い

50代半ばの宮本直治さんは大阪市の大病院に勤務する現役の薬剤師

である。数年前に「5年生存率60%」とがんと宣告された。医療関係者として普段から聞き慣れた言葉が自らに向けられたとき、どう気持ちを処理してよいか分からず、診察室を出ると、見慣れた風景が一変していたという。悔いない人生を、と考えてたどりついたのが、関心を持ち続けていた仏教を本格的に知ることだった。薬剤師としての仕事と平行しながら仏教を学び、浄土真宗本願寺派の僧侶になった。病院の夜勤明けなどの時間を用い、ボランティアとして仏教ホスピスに通う。がん患者グループの代表も務め、死をタブー視しないことを前提に静かな環境で生を見つめ直す「宿坊で語り合うガン患者の集い」も始めた。宮本さんは「人は骨と思い出ししか残せない。その中でどう生きていくかを問い続ける。いくら望んでも明日は来ないことはある。今日までの人生はOKと思えるかどうか、です」と語る。

大学生のころ、がんになった母を看取った。神戸で大震災に遭い、40代で自らもがん患者となった。その何一つが欠けてもこの立場にはいなかった。自分は病気になるために生まれてきたのだ。そんなふうになるようになった。今がすごく楽しい、という。「自分で何かをしたい、変えたいという思いではなく、何かに呼ばれている気がする。お坊さんになって3年でこれだけの景色を見せてもらえた。そこまで命を使ってきたか、帰っておいで、と言われれば、それで構わない」。与えられた命を精一杯使っている実感とともに、薬剤師の代わりはいるが、自分でできないことがこのジャンルにあるように感じる。

仏教や宗祖親鸞への思いは深い。ただ、ケアの現場で直接結び付けた言動は避けている。鳥取県の真宗寺院で行う「宿坊で語るガン患者の集い」も本堂で行うものの、阿弥陀仏を押しつけるつもりはない。自分にとって阿弥陀仏はリアルだが、受け取り方はさまざまに当然と考えるからだ。信者だけを対象としないことが前提であるケアの現場で、仏を万能のツールとして持ち出して語らない。それは、仏と僧侶と一般の人々との定式化された関係をいったんほどき、個として正対する覚悟の表明であると筆者は受け取る。自らの肩書は「宗教家」が感覚的にぴったりくる、と宮本さんは言う。「いのち」を慈しむ者としての「宗教家」とい

う表現が、さまざまな属性を外した後に残る核なのかもしれない。

同じくホスピスでボランティア活動をしている佐々木慈瞳さんは、奈良県桜井市の融通念仏宗観音寺副住職を務める在家出身の尼僧である。奈良から月に何日か、東京都多摩市にある一般病院のホスピス病棟を訪れる。共用スペースで折り紙を折っていると、声がかかって患者の病室に呼ばれたり、家族と会話を交わしたり、遺族会でオカリナを吹いたりする。剃髪した姿こそ尼僧だが、病院のスタッフは「何でも話を聞いてくれる人で、たまたま仕事がお坊さん」と患者らに説明している。慈瞳さん自身、請われないかぎりは僧侶や宗教者としての言葉や振る舞いを見せない。活動を取材した際、慈瞳さんが吹くオカリナの音色に耳を傾けていた男性が発した言葉が印象的だった。「妻を亡くしてがっくりしていた時、慈瞳さんが話を聞いてくれたり一緒に泣いてくれたりした。尼さんだからいいのではなく、そういう人だからいいんです」

慈瞳さんは、大学職員として産学連携の大きなプロジェクトに取り組むなどの充実した日々を過ごす中、がんになった父親が写経を望んだことから観音寺との縁を深めた。もともと、学生時代に専攻した古代史の現地調査で世話になっていた寺である。大学は待遇もよく不満があった訳ではない。ただ、大学職員は自分ではなくても代わりがきく仕事との思いが膨らみ、寺に入った。父の最期と出家は直結しないが、「今、振り返ってみると、僧侶になったのも、終末期の患者さんや家族の場に行くのも、父親を看取った経験からだろう」と考える。さらに以前に経験した身近な親族の死についても「保留にしてきたことに今、向き合っているのかな」との思いも抱く。「父親や、病院で見送った思い出深い人たちは今も近くにいて、私の背中を押してくれると感じている。だから歩みを進められる」と慈瞳さんは話す。

つらさや悩みを抱えて山上の寺を訪れる人々を迎えてやすらいでもらうとともに、病院や家庭、社会一般で心の痛みや悲嘆、終末期の恐怖を抱えて苦しむ人々に応えていきたい。ホスピスでの傾聴ボランティアはその一つだ。尼僧と認識されてはいるものの、あえて宗教者と主張しな

いことが一般病院というケアの場での信頼関係の醸成につながっている。ただ、言葉や振る舞いで宗教色を出さなくても、ケアの受け手は宗教者の中に何かを感じ取り、そこから自らが必要としている「宗教的なこと」を求める可能性がある。それは、か細い声や弱い反応かもしれない。アンテナの鋭さ、機微に分け入る繊細な感覚で、きちんと受け止める力が実践の場で求められると慈瞳さんは考えているのだろう。その一方で、宗教者が陥りがちな独善性に対する自戒の念の強さも言葉の端々に感じた。

もう一人、ケアに取り組む在家出身者を挙げたい。医療や福祉の現場に僧侶が存在すべきだと訴える真宗大谷派僧侶の三浦紀夫さんである。生老病死の苦に寄りそう理念の下、僧侶や介護スタッフ、医療福祉の専門家が連携しながら高齢者や障害者向けの施設の運営、独居高齢者支援の事業を進めているNPO法人「ビハーラ21」（大阪市）の事務局長を務める。臨床宗教師研修のプログラムも支援、受講生に実践の場を提供している。「会社に勤めてみたけれど、自分の人生はこれじゃないな、と思う人はこの世界に」と話す三浦さん自身、猛烈サラリーマンからデパートの仏事相談員を経て僧侶になった異色の経歴を持つ。

家庭は豊かではなかった。そのため、若い頃は金を儲けたいとの気持ちが高く、アルバイトに明け暮れて大学を中退、1991年に入った建築資材メーカーで社長に気に入られて秘書役となり猛烈に働いた。社長の死をきっかけに独立、高額報酬を得るコンサルタントとして活躍した。そんなころ、大阪市内の有名百貨店が顧客サービスの一環として仏事相談コーナーを開設すると知り、相談員研修を受けて勉強しようと考えた。会社員時代、社長の名代として数多くの葬儀の場に出向いたものの、父の死に際して会葬者への対応が十分にできなかったことが心残りだったからだ。担当者として実際に働き始め、すぐに現場責任者になった。デパートの一角にあるコーナーで、香典返しや先祖供養、仏壇購入の相談に訪れる客に対応した。驚いたのは、法事や葬儀などの実務的な相談そっこのけで、故人への思いや悲嘆、悔恨の感情を吐露する人が多かった

ことだ。「お盆のときは帰ってくるのか」「家に帰りたいがっていたのに、病院での最期でよかったんだろうか」「魂は今、どこにいるのだろう」。そんな話をじっくりと聴き、受け止める。「物を売るつもりはなく、勉強だと考えていて心にゆとりがある」ため、時間を気にせずに聴き続けた。「気持ちを整理してもらえれば」との思いがあった。そんな対応に「ここに来てよかった」と涙を流す人もいた。ブログで紹介したこともあって評判になったが、いささかシュールな光景と言えなくもない。繁華街の中でも特にきらびやかなデパートの片隅で、仏事相談の名の下に繰り広げられるグリーンケア。親の死、子どもの死、さまざまな死に接するうち、「金を稼ぐイケイケ猛烈サラリーマン」に反動がきた。金儲けとは縁遠い仕事にスイッチが入ったのである。

不思議に思ったのは、なぜ、お坊さんではなく、デパートの仏事相談員に話をするのかという点だ。客に聞くと、「お坊さんにこの話を？なぜ？」と逆に意外そうな問いが返ってきた。法要などで僧侶と顔を合わせる機会はある。ただ、お坊さんはこうした話をする人ではない、との反応だった。人が亡くなるまでは医師や看護師が丁寧に対応してくれる。亡くなったら家族は遺族になり、いきなり対応のバトンは渡される。次に親身に相談に乗ってくれるのは葬儀社の社員だ。ただ、遺族の頭は簡単に切り替わらない、と三浦さんは思う。生から死をつなぐ連続線の傍らに僧侶はいるべきではないのか。三浦さんは名刺を持って周辺の寺を次々と訪れ、役割を問うた。ある寺を訪問した際、「悲嘆に暮れる人の話を聞くのも僧侶の仕事ではないのか」と住職に聞くと、「本当にそう思うのなら、自分でやってみたらどうか」との返答があった。三浦さんはその言葉がきっかけで僧侶になった。高齢者や障害者が自分らしく暮らせるよう専門職が連携しながら運営する施設で、スピリチュアルケアとともに、衣食住を含めた総合的なケアにも取り組む。それが当たり前だと考えるからである。三浦さんが願う、福祉の現場に僧侶が普通にいる風景の実現には、数多くの僧侶が必要となる。そのために後継者育成に力を注ぐ。

身近な死が開く外への志向性

3人の行動や語りで注目したい点はいくつかある。医療従事者として活動してきた宮本さんは、自らの職業が代替可能との強い意識がある一方、宗教家として立つケアの場に「自分にしかできないことがあるかもしれない」との思いがあふれ出ている。死に直面して僧侶への道を歩んだものの、決して選択的な意思決定ではなく、「何かに呼ばれた」感覚というのも興味深い。ケアの担い手として、宗派色が出ることに非常に自制的であり、仏教という大カテゴリーですら慎重である。慈瞳さんも宮本さん同様、自身の社会的存在が代替可能であり、宗教者としてケアに取り組むことに活動の場を見いだしている。そこに特定の宗派色、大上段に構えた「天職」意識は感じられない。宗教者は自らがどうあるかを常に内省するべきであるとの禁欲的な姿勢を崩さない点で、社会から遊離しないように心掛ける強い意思もうかがえる。ケアに取り組む過程で踏み込んだ道が僧侶だった三浦さんは、福祉の現場に宗教者の需要があるにもかかわらず、それが満たされていないという現状認識を持ち、一般社会で「自分の人生はこれじゃないな」と感じる人を招き入れたいと考える。それは、宮本さんや慈瞳さんのように、代替可能な自分ではない歩みを進めようとする人々への支援と捉えることが可能だろう。いずれにせよ、宗教界、仏教界の内側からなかなか出る発想ではない。

3人の活動や動機には、いずれも身近な「死」が関わっている。それは取材で出会った多くの在家出身者もほぼ同様である。ある禅僧は大切な友人の死を体験し仏門に入った。死別の苦しみ、悲しみへの思いは人一倍強く、東日本大震災後に悲しみを見詰め続けるという座禅のスタイルを打ち出し、悲嘆を抱える人々に対しての参禅指導、いわば禅によるグリーフケアを行った。別の真宗僧侶の活動の原点は子どもの死である。個人の会社を営んでいたがうまくいかず、「精神的に臨界点に達しようとしていた時」に知り合いの住職に「引っ張り出されるような感じ」で山門をくぐった。その後、重い病を抱えて亡くなっていく実子の命を支え

てもらった病院、介護福祉の現場の人たちへの感謝の念から、自らも僧侶としてケア活動に踏み出す。ただ、他の宗教者とケアの現場で連携する機会を得て、僧侶の枠に収まらない「宗教者」としての幅の広い活動の必要性を認識するようになった。

出家と身近な死が古来深く結び付いているのは、言わずもがなである。ただ、紹介した在家出身僧侶たちは、身近な「死」の体験をもって内に沈潜せず、医療や福祉の現場といった外に開いたケア志向を顕著に示したことに特徴がある。東日本大震災以降、それがあふるボリューム感を持って展開している点に注目したい。子どもの死によってケアに深く踏み出した僧侶の言葉が心に残る。「病院などで仏教的な問いが出ると『そら、来た』と待ち構えていたように答えるが、それは多分に僧侶の領分を發揮させてやろうという受け手の気遣いである場合がある」。こうした冷静な自覚こそ、一般社会との地続き感を持つ在家出身者の真骨頂ではないか。社会感覚を保持した「在家」出身者と、伝統と存続を担うために模索を続ける「副住職」という二つの支え手が推進力となり、「超宗派」で公共空間における活動が担保できれば、ポスト福祉社会の中で宗教者のケアがより受容されるようになるだろう。宗教とケアがかみ合う歯車が、より回転数を上げて定着していくことに期待したい。

私と宗教とケアと

私事で恐縮だが、最後に筆者の昔話を記したい。

2014年10月に父が心疾患のために急逝した。81歳だった。父子で話した記憶はあまりない。父と息子の関係は多くがそうだろう。ただ、強烈に覚えている子どもの頃の思い出がある。

1970年秋、生後間もない妹が亡くなった後、父は小学生だった筆者を横に置き、毎夜「正信偈」を唱えるのが常になった。仏教についての知識はさほどない父だったが、滋賀県の真宗地帯に生まれ育ち、東本願寺

の門徒意識が強かったためだろう。狭い居間に座布団を2枚用意し、祖父が買ってくれた真新しい仏壇のろうソクに火をともし、2人で正座して声を出した。半年以上続けたらどうか。母はほとんど参加しなかったが、すぐ近くの台所にいた。父とともに正信偈を唱えることが日課となった筆者は、言葉の意味は分からないものの、行為の意味はぼんやりと感じていた。父と母は、長男である筆者を伴走者として、長女の死を受け止めるための時間を過ごしていたのだと思う。

秋から冬、そして春へと季節が移る中、京都の小さな家での2人の勤行は毎夜続いた。もちろん、住職によるお参りも定期的にあった。読経が終わると、両親と住職がしみじみとした会話を交わした。父は何度も繰り返した。「生きていたら死ぬ。誰でも死ぬ」「早いか遅いかだけだ」。そんな父に住職はおだやかに対した。正信偈をあげてはいるものの、技術畑でおよそ宗教的とはいえない父が、住職と死について語り合い、娘の死を確認する。そんな一連の光景が、筆者にとっての宗教がもたらす初めてのケア体験だった。宗教とケアについて考えてきたこの間、父とのささやかな思い出が常に頭から離れなかった。